

ロシアトヨタ戦記

西谷 公明著



中央公論新社

20世紀の末、自動車産業には未開拓の市場がまだ多かつた。中国やインドと並び、米欧や日本企業が壮絶な先陣争いを繰り広げたのが、冷戦終結で脚光を浴びたロシアである。

「三河の田舎ザムライ」と言われ、石橋をたたいても渡ることが少なかつたトヨタ自動車はこの時最も果敢に動いた。当時の奥田碩社長は「変わらないことが最も悪いことだと心得よ」と言い放ち、拡大路線へと経営の舵を切る。

スカウトされたのが、シンクタンク勤務だったロシア専門家

の著者だ。天然資源に依存したもう一経済、文化や政治の厚い壁。不条理な出来事が次々と襲いかかる中、ロシアは徐々に欧洲有数の自動車市場に育つ。グローバル企業に脱皮するトヨタの姿とそれがシンクロする。

結果をいえば、2008年のリーマン・ショックでロシアは経済危機を迎える。奥田氏の拡大路線も批判の矢面に立たされた。だが、バブル崩壊後の沈滞した空気や、冷戦終結で躍動する米欧企業に気押されがちだった日本の経営者を刺激したのも、あの時代のトヨタの挑戦だった可能性はある。

リスクを取らなくなつたといわれる日本企業に奮起のきづかげをくれるかもしれない。「米欧企業何するものぞ」という当時の人々の氣概がにじむ。（中央公論新社・2420円）

新市場開いた果敢な挑戦